

婚活現象と現代家族のゆらぎ

——「子育て」意識と「キャリア追求」意識——

長谷川由利子

HASEGAWA Yuriko

1. 婚活現象に関する議論

1.1 婚活とは

「婚活」という言葉は現代における就職活動のように、結婚を目標として積極的に活動する「結婚活動」を「婚活」と略したことによって誕生した（山田 2008）。この言葉が生まれたことによって、従来の結婚情報サービス業者が「婚活」と銘打って入会を勧めるようになったり、男女の出会いに関わる様々な商品やサービスに「婚活」の名がつくようになったりするなど、産業としての「婚活ビジネス」が流行するようになった。

社会一般では流行としての「婚活」が捉えられがちであるが、「婚活」の名付け親である山田はあくまで「少子化問題の現状」と「人々の意識」の狭間に大きなギャップがあり、この差異を埋めたい思いから「婚活」を提案したと述べている（山田 2010）。このギャップとは、1) 少子化の主たる原因が、結婚の減少であることが語られていない 2) 結婚したくてもできないことが未婚化の原因であることが語られていない 3) 未婚女子の多くが男性に経済力を求めていることが語られていない、の3点である。

では「婚活」とは具体的にどのような活動であるのだろうか。一般的に「婚活」は合コンや結婚情報サービス産業を活用することや、可能な限り高収入の男性を捕まえることであると解釈されがちだが、山田の意図した「婚活」はこれと異なるとされている（山田 2010）。こうした活動の他

に、自分を磨いて魅力を高めること、男性においてはコミュニケーション能力を高め、女性においては経済力をつける、「男は仕事、女性は家事」という固定的性別役割分業意識からの解放を目指す必要があるとしている。つまり男性の雇用が不安定化しても、女性の経済力によって結婚後の経済的リスクに備えることが提案されているといえる。

2. 性別役割分業に基づいた結婚制度の変容

2.1 個人主義化する結婚制度

結婚とは、以前は共同体や家族といった集団の利害から考慮される公的イベントであった（善積 2000）。かつての農漁村の共同体主義社会では、村内婚が中心で結婚は村の秩序・利益の観点から規制される共同体主義的結婚が通例であり、その後家制度が浸透する社会になったことで、家族主義的婚姻が主流となった。結婚は家繁栄の手段とされ、結婚相手の家格や家柄を重視し、また本人の意思よりも家長の権限によって結婚が決まっていた。しかしながら、戦後の新民法では結婚は当事者間の合意が必要と明記されるようになり、現代に至るまで結婚は私的イベントとして扱われるようになってきた。善積は個人主義的婚姻においては、結婚そのものに価値がおかれ、当事者本人たちの意志が優先され、自由恋愛に基づいた配偶者選択が行われると述べている（善積 2000）。こうした観点から、以前の結婚は公的なメリット・

デメリットを考慮して行われていたが、近代社会においては個人のメリット・デメリットから選択されるようになってきている。

2.2 不安定さ(緊張関係)を内包する現代の家族

現代においては愛情を基盤とするために結婚が難しくなっている。この愛情を基盤とする家族形成は、戦後の「家族制度」と「民主主義的家族」の対立関係によって理解を深めることが出来る(本多 2013)。本多は戦前の「家族制度」において「民主主義的家族」とは異なる形の「『仲よくする』しかた」があるとし、「家族制度」から「民主主義的家族」への転換は、そうした情緒的関係を壊すという緊張感のもとに主張されていたのだと解釈している(本多 2013)。よって戦前と戦後の家族の二項対立のなかには「明るくなごやかでありえた家族制度」と「必ずしも明るくなごやかにならない民主主義的家族」という対立が見出せる。

「家族制度」における「『仲よくする』しかた」、つまり情緒的関係の形成は国の強い影響力の下にあった。戦前期における教育勅語に「夫婦相和シ」と記されるなど、国が発行する啓蒙書には「和」という言葉が積極的に使われていた。「和」は「情緒的な一体感」を指す言葉であるとされ、「家族の一員が他の家族員たちと異なった考え方や感じ方をすれば、和の状態はこわれてしまう」(磯野・磯野 1958: 116)と述べられている。また戦中に文部省が出版した『国体の本義』(文部省 1937)の「『和』とまこと」という章にも「我が国の和は、理性から出発し、互に独立した平等の個人の機会的な協調ではなく、全体の中に分を以て存在し、この分に応ずる行を通じてよく一体を保つところの大和である」(文部省 1937: 51-6)とされ、平等ではない役割維持が国に公認されていたことがわかる。また『国体の本義』には

「夫々の集団には、上に立つものがあり、下に働くものがある。それら各々が分を守ることによって集団の和は得られる」(文部省 1937: 51-6)とも記されており、不平等の序列的關係を前提とした「情緒的な一体感」が形成されていた(本多 2013)。

この「和」における序列的關係について「『家の和』を破らないためには、各自がその分をまもり、目上は温情をもって下にのぞみ、目下は奉公の誠をつくし、上は下に扶けられ、下は上に愛せられるように心がけることが必要であった」(磯野・磯野 1958: 190-1)と、序列的關係によってむしろ情緒的な一体感が保たれていたとされる。情緒的關係は、「主体的」な精神とは異なって人の精神を「外から」規定する権威への服従であり、自らの内面的な命令に媒介された自主的服従ではなく(川島 [1948] 1983)、自己の良心への服従にもとづく「主体的」な愛情ではない(本多 2013)とされる。また「家族制度」における夫婦関係は「外的な態度や行動を外から規定する」「役割」が優位で、心理的な相互作用は役割関係の中に埋没してしまっている(山根 1956)。従って、「家族制度」における情緒的關係は国を始めとする外的な権威に対する服従によって形成され、またその「和」を保つという家族間の序列的な役割維持によって継続されてきたのである。また「権威」は人情的情緒的性質をおび、権力が権力としてあらわれない(川島 [1948] 1983: 9)。こういった「家族制度」の序列的關係が表面にはみえづらい心理的な強制力を持っていたのである(本多 2013)。

このように不平等かつ強制的な「家族制度」に対して、家族構成員の「権利義務」意識を認め、「主体的」な愛情にもとづいて家族形成するのが「民主主義的家族」である。この「権利」の意識は、家族関係が機能不全を起こした際に、構成員

が対立することをあらかじめ保証するものでもあり、「個人」であることを意識させるために家族の没我的な情緒の一体感を阻害するものでもある。よって、「民主主義的家族」が「明るくなごやか」であるかどうかは家族構成員が「主体的」な愛情をもてるかどうかによって左右される。もし「主体的」な愛情をもてなくなれば、家族の結合は弱まらざるをえないということになる。北村達は「近代家族は家族全員を人格的に開放し、自由を尊重しているから、意見の衝突、権利の主張、愛情の冷却など種々の原因によって、紛争が表面化している」（北村 1955：83）と述べている。

2.3 個人の選択によって形成される「合意制家族」

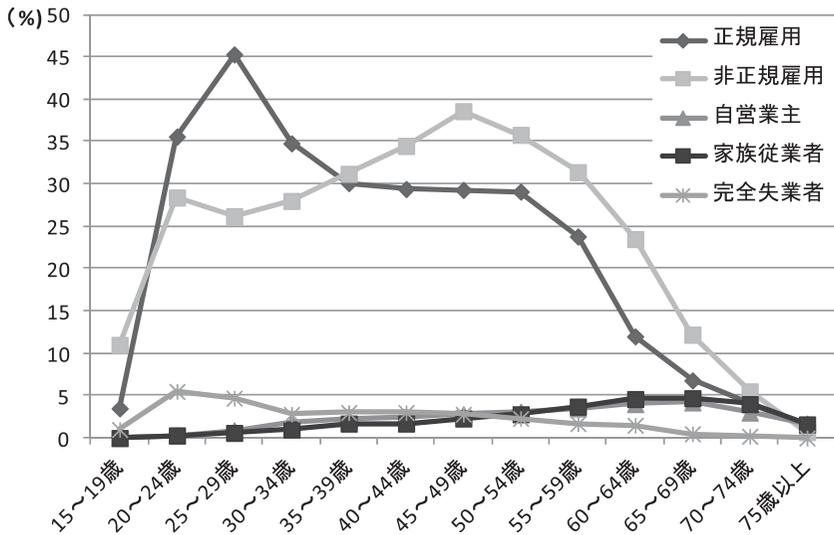
「家族制度」のように集団の側から家族を捉えるのに対して、むしろ個人の側から捉える「ライフスタイルとしての家族」がある（野々山 2007）。「家族制度」崩壊後、「民主主義的家族」への移行が望まれたものの、真に互いに平等な関係というよりは、性別役割分業に基づいた夫婦制家族が近年に至るまで形成されてきた。この夫婦制家族においては、高度工業化によって企業における雇用労働者である夫（父）ひとりの収入にほぼ全面的に依存することによって構成され、妻（母）においては家事育児に専念することが望ましいとされてきた。つまり性別役割分業という「固定的」な役割が存在することで、「家族制度」程ではないが、夫婦の間には平等ではない関係性が存在していたといえる。

これに対して、「ライフスタイルとしての家族」ではより平等な夫婦関係を築くことができる。これは、これまで家庭内労働に従事していた既婚女性がある程度の高度な専門的能力や女性固有の能力を重視した職業に就くようになったことによって、形成されるようになった。この女性の専門職

への就労は、高学歴化も背景にあるとされている。また女性たちは出産育児期を終えたあとと老年期に入る前の段階で、長い期間の空白部分が生まれることになり、社会からも妻役割や母役割以外の期待がなされるようになってきた（野々山 2007）。

よって女性が男性と同等のキャリア志向である場合には従来の性別役割分業は成立せず、女性においては家族システムに拘束されていたライフサイクルから自由になり、個人の意志に基づいてライフコースを選択できる可能性が生まれてきた（野々山 2007）。このような家族スタイルにおいては人々の家族生活における志向は、生活向上を目指した「向上動機」から生活選好の充実を目指す「家族生活の選好動機」へと変化することになる。これによって男女ともに、結婚（いつ誰と）や出産（いつ何人）など、従来からの結婚に関する年齢規範や性別規範が希薄化していくとされ、結婚したいからといって、直ちにできるとは限らなくなった（野々山 2007）。一方でキャリア志向であっても、結婚・出産の困難な世代をみて、「早婚、早産志向」へとシフトする人もいる（白河 2013）。彼女たちは健康で安定した出産が期待される若い時期に結婚・子育てを済ませ、その後は再び男性と同等のキャリアを歩みたいと願っている。

以上のような夫婦の経済力を平等に保った上での家族形成は決してメジャーではない。図1は日本女性の労働力率曲線を就業形態別に示したものだ。この調査結果から、20代は正規雇用が最も高いのに対して40代以降は非正規雇用が逆転しているのがわかる。多くの人が実際には出産・育児の時期になると経済力を維持できず、子育て終了後も経済的に夫に依存していると思われる。



資料: 総務省「労働力調査(詳細集計)」(平成24年)より作成
 注: 正規雇用は、「正規の職員・従業員」と「役員」の合計。
 非正規雇用は「非正規の職員・従業員」

図1 女性の年齢階級別労働力率の就業形態別内訳 (女性)

2.4 子育てに対する規範意識

これまで結婚後の家族モデルの変容について述べてきたが、婚前の男女関係にも大きな変化がある。現代においては恋愛の自由化によって妊娠先行型結婚、いわゆる「できちゃった結婚」と呼ばれる結婚が行われるようになってきた(永田 2003)。これまでの結婚では「愛情が先」だったが、妊娠先行型結婚においては「子どもが先」に生まれ後に愛情が形成される(永田 2003)。この妊娠先行型結婚は、「結婚は双方の愛情の高まりの帰結であるべきであり、そうでない結婚は理想的ではない」という立場によって批判され(永田 2003: 60)、「妊娠をきっかけに結婚した夫婦は恋愛結婚の夫婦に比べて情緒的な結束力に欠けているのではないかという点が問題化」されてきた(永田 2003: 60)。こうした批判に対して、ロマンティックラブに基づく「理想的な結婚相手」を探そうとする心性はかえって結婚を遠ざけるとされ、ロマンティックラブに対してむしろ忠実であ

ろうとしたため結婚モラトリアム状態が続いてしまうと語られている(永田 2003)。

永田は妊娠先行型結婚について、結婚では法的な手続きを伴うはずであり、子どもはこうした手続きを経て産まれるべきだという規範があると述べている(永田 2003)。この規範があるからこそ、妊娠先行型結婚においては妊娠がわかった時点で「急いで戸籍上の夫婦になる」のである。こうした若者たちの動きは一見結婚という制度が機能していないように見えて、最終的には近代家族が再生産されている(永田 2003)。

3. 非正規雇用者の出産・育児について

非正規雇用であったとしても夫婦共働きであれば可能ではないかという発想もあるが、松田茂樹は未婚者の間でも多い「若年フリーター」や「契約社員」について「夫婦ともフリーターや契約社員などとして共働きをして、出産・育児することは可能ではあるが、それをするのは正規雇用者同

士の夫婦以上にハードルが高い」(松田 2013 : 85) と結論付けている。その理由として 1) 雇用の安定性の低さ 2) 育児休業から漏れる非正規雇用者 3) 保育所への入りにくさ、をあげている。

1) 雇用の安定性の低さについては正規雇用に対しては解雇に対する要件がある一方で非正規雇用は期限が定められた雇用契約である。第一子出産前に正規雇用者であった女性はその約半数が出産後も就業継続しているが、第一子出産前に非正規雇用者であった女性はわずかに二割しか出産後も就業継続していない(国立社会保障・人口問題研究所 2011)。また不況や企業の業績悪化の際には非正規雇用の人件費から削減される傾向もある。よって、出産・育児期に夫婦とも非正規雇用同士で共働きをすると、雇い主側の都合によって経済的リスクが大きく左右されることになる。

次に 2) 育児休業から漏れる非正規雇用者については、育児法では非正規雇用者の継続雇用された期間が一年以上で、かつ子どもが一歳を超えて引き続き雇用されることが見込まれれば育休取得が出来るとされている。しかしながら、非正規雇用者がいる事業所のうち、育休を取得した非正規雇用者がいる事業所の割合は、契約更新回数の上限のない非正規雇用者がいる事業所で 4.5%、契約更新がない。あっても回数に上限のある非正規雇用者がいる事業所ではわずかに 0.2% であるとされている(労働政策研究・研修機構 2008)。このことから、育休がとれない非正規雇用者の女性は、「育休を取得できずに子どもが一歳まで仕事を休んだ場合、その間の所得保障はない」「育休を取得できなければ、契約が更新されることが保障されない」というデメリットを抱えることになる。

最後に 3) 保育所への入りにくさについて、認可保育所において非正規雇用者は育休を取得することが難しいため、出産後は無職になっているこ

とから保育所を利用しにくいとされている。就労しなくても求職活動をしていれば保育所の入所を認める自治体もあるが、現実には保育所の入所は原則既に就労している者、中でも労働時間が長い者が優先されるために、無職では利用しにくい。また、保育所に子どもを預けられなければ無職の者は求職活動ができないという「ジレンマ」もあるとしている。一方認可外保育所では、申し込み時点において就労しているかどうかは問われないが、認可保育所と比べ割高である。収入の低い非正規雇用者にとって認可外保育所を利用することは経済的に難しく、どちらにしても保育所の利用がしにくい現状が伺える。

4. 問題提起

少子化問題の発端は未婚化に要因があるとし、これを解消するために積極的な結婚へ向けた活動すなわち「婚活」することが、これまで勧められてきた(山田 2008)。この「婚活」とは異性との出会いを増やすこと以外に、昨今の経済的事情から女性も経済力を向上させ、夫婦共働きの家族を築くことが重要とされている(山田 2010)。

こうした「婚活」現象が広がるまでには、不平等な家族関係を前提とした「家族制度」(本多 2013) から、性別役割分業に基づいた「夫婦制」家族へと移行し、一部では更に家計の負担も平等である「共働き」家族の形成もみられている(野々山 2003)。こうした夫婦の力関係は経済的責任を主に男性が持っていたのが、男女同等に経済的責任を持つように移行してきたという解釈もできる。よって女性がキャリア志向である場合、キャリア優先の人生設計から晩婚化が高まると想像できる。一方で近年、上の世代が晩婚化・未婚化するのを見て「早産・早育」を望む人たちも出てきた(白河 2010)。こうした女性たちは「20代のうちに出産・育児を済ませ、30代からはバリ

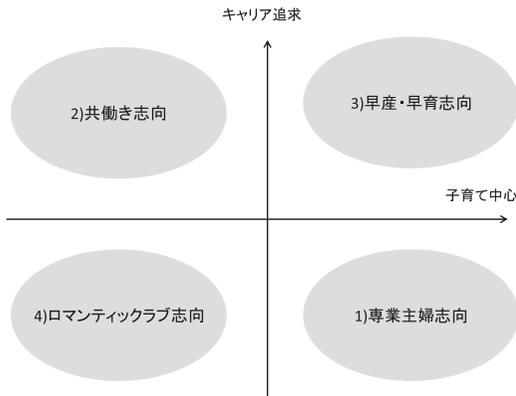


図2 未婚女性の結婚選択意識モデルと分類ごとの仮説

バリ働く」ことを願っている。

婚前の場においても、恋愛自由化によって出産から結婚に至る「妊娠先行型結婚」が行われるという変化が起こってきた（永田 2003）。ここでは結婚と言う手順を踏まずに出産したとしても、やはり結婚と言う制度が求められている。つまり現代においては夫婦の愛情の結びつきよりも、子育ての場として「結婚」が求められる傾向がある。

以上の先行研究から、現代の女性は「子育て」と「キャリア追求」に対する価値観によって結婚に対して望むものも変わると考えられる。従って結婚するにあたって「子育て」意識が強い人と「子育て」意識はそこまで持たない人、職業において「キャリア追求」する人と「キャリア追求」に価値を置かない人に分けることができる。この分類をもとに、次の未婚女性の結婚選択意識モデルを作成した（図2）。

またこのモデルの各象限ごとに、1) 専業主婦志向 2) 共働き志向 3) 早産・早育志向 4) ロマンティックラブ志向の傾向があると仮説する。まず第2象限にあたる 1) 専業主婦志向の人々は、自身のキャリア追求に価値を置かず結婚する上では子育てに力を入れたいと望んでいる。ここでの専業主婦とは全く家事・育児に専念する訳でな

く、パート・アルバイトで再就労する人場合もあるが、家計における経済的責任の割合は低い。次に第4象限にあたる 2) 共働き志向では、キャリア志向が強く男性と同等の経済力を持っている。男女ともに最も経済的リスクが低い選択肢であるが従来の年齢や性別に関する規範意識が希薄な為、晩婚化の傾向も強くなる（野々山 2007）。この傾向に反して第1象限にあたる 3) 早産・早育志向の人々は 2) と同様にキャリア追求型であるが、若いうちにキャリアよりも出産・育児を一時的に優先してもよいと考えている。3) の実現には女性が職業において実力や理解ある職場を持ち、かつ子どもを育て上げるだけの高度なスキルが必要になってくる。最後に第3象限にあたる 4) ロマンティックラブ志向の人々は、これまでの先行研究ではあまり触れられてこなかった人々だ。彼女たちは「子育て」にも「キャリア追求」にも価値を置いていない。特徴としては「子育て」を中心に置かないことで「夫婦生活」（または交際関係）が中心となり、結婚モラトリアム（永田 2003）に陥りがちである。この場合、永田が述べる様に子どもを授かることで初めて結婚する傾向が強いと考えられる（永田 2003）。

本稿においてはインタビュー調査によって 1) 2) 3) の分類と先行研究から仮定した各分類の特徴が合致するかを検証すると共に、4) の場合は実際にどのような特徴が見られるかを分析する。

5. 調査

5.1 概要

2014年8月20日から同年9月10日の期間に、23～24歳の未婚女性13名と親3名に対するインタビュー調査を行った。調査対象者の選別基準として、大卒であっても就職後2年目でありキャリアに対する考えも明確になり始める時期である為23～24歳に限定した。また結婚制度の変容が女

表1 調査対象者の概要

	最終学歴	就業状況	職業
A	大学	無職(職歴あり)	無職(SE歴あり)
B	大学	正規	銀行(一般職)
C	専門学校	非正規	接客(アルバイト)
D	大学	正規	銀行(総合職)
E	高校	非正規	派遣(事務職)
F	大学	非正規	派遣(添乗員)
G	大学	正規	メーカー(一般職)
H	大学	無職(就活)	無職
I	大学院(在学中)	学生	学生
J	大学	正規	看護師
K	大学	正規	看護師
L	大学	正規	メーカー(総合職)
M	専門学校	正規	金融(地域総合職)

性の社会進出と伴っていることが明らかであるため、調査対象者を女性に限定して行った(山田2010)。更に調査対象者の「子育て」意識が、親からの影響を受けて形成されている可能性があるため、親当人に対するインタビューも依頼した。依頼の結果、協力が得られたのは2組(計3名)である。親へのインタビュー許可が得られなかった人については、親との関わりについて質問することで補っている。インタビューは一人当たり20分を目安に行った。

対象者の学歴については大卒10名、専門卒2名、高卒1名である。また現在の雇用状況については正社員6名、準正社員1名、非正規社員2名、院生1名、無職2名である(表1)。なお対象者名は調査を行った順にABCと呼ぶことにする。また、親についてはBさんの母親と父親、Dさんの母親に対して実際にインタビューしている。

本調査では、ある程度の質問リスト(表2)を作っていく、臨機応変に質問を行う半構造化インタビューを行っている。親当人に行ったインタビューでは質問リストを子どもへの要望に置き換えて質問している(例:お子さんに結婚して欲しいと思いますか、お子さんにどんな相手と結婚して

表2 質問リスト

【結婚について】

- ・結婚願望はありますか
- ・結婚相手にどんな条件を求めますか
- ・非正規社員を結婚相手として見えますか
- ・あなたは何のために結婚したいと思いますか

【出産・育児について】

- ・出産願望はありますか
- ・結婚相手に育児・家事の協力を求めますか
- ・出産・育児をしても仕事を続けたいですか

【家族について】

- ・親と、あなた自身の結婚について話すことはありますか
- ・親(または親以外の人)の結婚生活を参考にしていきますか

【婚活について】

- ・いま婚活をしていますか
- ・(婚活経験がある人は)感想と、今後も婚活をしたいと思いますか
- ・(婚活経験がない人は)今後やってみたいと思いますか、するならどんな風にやりたいですか

欲しいですか、など)。なお質問リストは先行研究に従って、以下の内容を確認するために作成した。「結婚について」は結婚に対する考えが個人主義化(または民主主義化)しているか(善積2000)(本多2013)を確認する。「出産・育児」については「職業意識」「子育て意識」(白河2010)(永田2003)を確認すると共に、対象者の性別役割分業意識(野々山2007)を把握する。「家族について」では親から受ける「職業意識」「子育て意識」を把握し、その規範意識をモデルとしているか確認する。また「婚活について」で、「婚活」の捉え方が人によって異なる(山田2010)おそれがあるため、対象者の考える「婚活」について実際にやってみた人には感想をきいている。

5.2 調査結果

結果内容は、図2より1)専業主婦志向2)共働き志向3)早産・早育志向4)ロマンティックラブ志向をもとに記述する。調査対象者がどの分

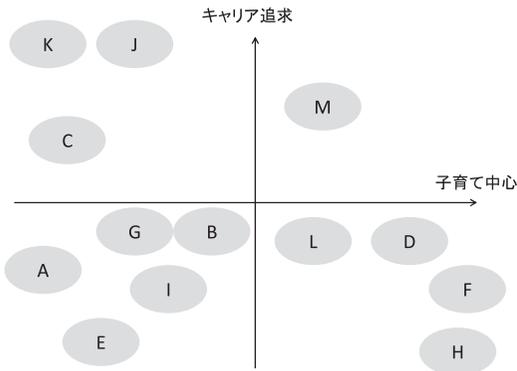


図3 調査対象者の結婚選択意識

類に当てはまるか位置関係も含めて、インタビュー結果から定めた(図3)。

(1) 「子育て中心」かつ「キャリア追求」ではない—専業主婦志向

このタイプは、育児・出産を優先としてパートタイムなどで働くことを理想とする人々を指す。この傾向がみられたのはDさん、Fさん、Hさん、Lさんの5名であった。正社員である人であっても、結婚後はいったん仕事を辞めて育児に専念し、後に機会があればパートタイムとして再び働こうと考えている。こうした価値観をもつことから、結婚相手の条件で経済力が大きい傾向があった。

Dさん：理想を言ったら、働かんで良いよ、趣味程度でいいよって言ってくれる人がいいけど、現実には厳しいと思うし。あるにこしたことはないけど。フリーターはあまりにも。子育てはしたいし、子育てをまかせっきりで私が仕事って感じではないし。

Fさん：子どもは育てたいから。子どもを育てられへんくらいの収入はないかな……。うちは、子ども時代って大切やと思うから。ある程度の時期までは絶対一緒にいないと欠けるも

のがある気がする。専業主婦になりたいとは一切思わんけど。そのうち、息苦しくならんぐらいでパートしたい。

相手の経済力についてDさんの母親も次のような意見を述べている。

Dさん母：非正規で、結婚できない気持ちってすごくよくわかるんですよ。よっぽど強い人じゃないと自分のバックボーンがないのに、嫁に来いとは言えないだろうし。でも本当は、年収200万300万の人たちでも、暮らせないことはないと思うんですよ。女性もソコを求めらんじゃないよって、私も言い続けたいといけないうし……。でも楽しみたいしね。

またFさんが述べるように、彼女たちは専業主婦として家庭にこもりきってしまうことも望んでいない。むしろ、「息苦しくならない程度に」とあるように、全くの専業主婦に対してネガティブなイメージを持っている。しかしながら、やはり子育て中心であるのは親からの影響が大きいようだ。Fさんの両親は家族づくりに対する思い入れが強く、Fさん自身も家族を持つことへの憧れを持っている。

Fさん：親にも自分の子どもと仲良くしてほしいし、それが楽しいやろうなあっていうイメージで。早くみんなでご飯食べたいとか、そんな感じ。みんな仲良くしたらなって、そういうの。

こうした意見は、DさんやLさんにもみられた。彼女たちにとっては、結婚とはすなわち子どもを産み家庭を持つことだという意識が強い。

D さん：うちの母は結婚と出産が同時。(自分は)結婚生活での恋愛の延長みたいのは全くいらんと思うけど・・・(友達と)喋ってたら、2年は2人の生活をしたいっていう人もいますけど。結婚する上でそういうの(2人だけの生活)はいらんと思うてる。

D さんは母親へのインタビューも行ったが、母親はDさんの結婚に対して「どうしてもとか、そういうのはない」と回答する一方で出産について「子どもは産んだらいいんじゃない、と思う」と回答している。そして、子育てについてはやはり責任を持って親が果たすべきと言う考えが強い。

D さん母：女性が働きにくいと考えたことはなかったけど、対等であるべきという考えはあった。でもいざ自分が結婚して家庭を持つと、対等であるべきというだけでは・・・どっちかが犠牲にならなければならない。両方が走り回ってしまっちは、誰が子どもの面倒をみるの?っていう。この子がちっちゃい時は関東にいたんですが、働くとなると両親ともに都内に通勤になる。そういう親御さんは2重保育、3重保育していて。それはしたくない。誰が犠牲になるのか?ってときに、子どもが犠牲になるのは、あたしは嫌だし。周りにもして欲しくないっていう。

Hさんは結婚において「とりあえず子孫を残すのは当たり前」と回答していること、またLさんは「仕事よりは子育てがしたい」「(自分が)専業主婦やったら、結構な割合で私がやっている」と回答していることから2)に分類した。では、キャリアについては何と回答しているか。

D さん：自分の職業観がさ、結婚するまでに勤められたらっていう感じやし。そこを覆すほどに(経済的な)責任を負えるかっていうのは、自信がないです。

Dさんはこのように、明白に結婚するまでの職業であるという意識が強い。Fさんにおいても前述から出産したら一旦仕事を辞めるつもりという。また、Hさんは現在就職活動中であり、明確なキャリアも定まっていないことから現段階では非キャリア追求として扱っている。LさんはFさんと同様、夫に収入があるのなら出産後は一旦仕事を辞めたいという意見であった。ここで特徴的なのは、正社員総合職として働くDさんやLさんが出産を機に仕事を辞めたいと考える点である。

それでは、子育て願望が強い彼女たちは「婚活」にも積極的だろうか。結果としては、Hさん以外の3人は「婚活」経験があり、積極的な行動をみせている。しかしながら、「婚活」に対する疑心を抱く人もいる。

L さん：変な空気なかった?あとああいうとこに来る人はなんか、年取とか、いいとこをアピールしすぎてたら引く。結婚結婚押しで、相手を見ろというよりは結婚だけは嫌。

またFさんは「スカートをはく、誘われたところにはいく、笑顔で過ごす」を実践していると回答しており、「婚活」に対して個人的な解釈を持つ場合もみられた。

(2) 「子育て中心」ではない、かつ「キャリア追求」-共働き志向

この分類に当てはまるのは、Cさん、Jさん、Kさんである。JさんKさんは看護師としてのキャリアを確立させている一方で、Cさんは転職

活動中でキャリアが定まっていなかったが、インタビュー内容からはキャリア追求の意識がみられた。Jさん Kさんは専門職と言うこともあり、ライフコースが非常に明確であり、結婚に対する理想や要望も具体的であった。

Kさん：結婚願望はある。30までには子どもが欲しい。結婚してすぐはしんどいし、30で一人産んで、33でもう一人がいい。話しっかりと聞いてくれる人がいい。アドバイスはいらんねん。

Jさん：35までに2児は欲しいから、30までには結婚したいかな。仕事はしたいから。(相手は)仕事を理解してもらえんとあかんかな。

また、2人とも専門職として今後も働いていくつもりだが、結婚するなら相手にもしっかりとした経済力を持っていて欲しいと考えている。

Jさん：もし彼が鬱になったりして・・・とかならあれやけど、最初から仕事してへんとかは、人として嫌。社会に就けへんやつが、家庭つくれるかって感じ。

Kさん：安定してない。自分が養いたいとも思わないし。コロコロ代わるのは、嫌。

この2人に対して、Cさんはアルバイトとして雑貨屋さんで働いている。現在キャリアを追及しているわけではないが、結婚するなら共働きを考えている。

Cさん：専業主婦になると、後々が大変やと思うから、もし離婚になっても仕事は続けた

いよね。母にも、金銭面では自立しといた方がいいって言われるし。専業主婦になって何もせんよりは、パートしといて経験積んどいた方が(本格的に働こうと思った時に)もぐりこみやすいと思う。出産後は大変か、やってみんとやけど・・・実際共働きをしないと難しそう。

また、Cさんは結婚することで女性の立場が弱くなってしまう事も語っている。

Cさん：女の人にさ、結婚するとデメリットが多い気がするし。仕事辞めなあかんやん。いま社会保険的にさ、出産の時にあるけど。実際にあれ、どうなかなって思うし。使えたとしてもどうかなと思うし。

Cさんは母子家庭で母親が苦勞して育て上げたこともあって、結婚に対しては堅実な考えを持っている。

Cさん：実際考えて、アルバイトって安定しない。結婚っていう共同作業において、それは不安やからせめて準正社員であって欲しい。それこそ子ども産むって考えると。

このようにCさんは安定性から結婚相手にしっかりとした収入を得て欲しいと願っている。対して、Jさん Kさんの結婚相手への経済力を求める理由は、少し異なっていた。

Jさん：親の中に仕事してない相手と結婚するっていう選択肢がない。私立まで行かせたのに・・・選べよって言われるから。

最後に「婚活」についてはJさんは参加経験があったが、KさんとCさんは参加経験がない

と回答している。

(3) 「子育て中心」かつ「キャリア追求」—早産・
早育志向

Mさんは専門卒後に出版社の下請け企業に就職したが、過酷な労働環境から金融会社へ派遣社員として入社した。そこから業績を伸ばし、現在は拠点正社員に昇進している。Mさんは職業意識が高く、以下のように今後は正社員になれるよう頑張りたいという。

Mさん：仕事好きやねん。だから男に生まれたかった。出世コースを歩みたかった、上司に媚うって。でも頑張って、わたし上まで上がってきた方やで。派遣から会社雇用になって、もう一個上の拠点正社員っていう。あとちょっとで正社員。タイミングが良かっただけやけど・・・そっから、いかに正社員になるかっていうのを、考えてる。でも評価がなかなか・・・その評価も、(自分は)うちの班のセンターで4番目。同じ種類の社員やったら一番上にならないと、なかなかね。

Mさんは仕事において「自己実現」意識が高い。また、こうした職業意識からか、結婚相手が非正規であっても構わないと言う考えを持っている。

Mさん：あたし、別にいいと思う。別に、非正規でもわたしはいい。だって、フリーターでもめっちゃ儲けてる人いるし。でもそういう人と結婚したくない女性が大半やと思うけど。わたしは特例。

(その考えはどこで育った?)

Mさん：わからんけど、養って欲しいとも思ってないし、結婚しても働きたい

Mさんは仕事に対して強いやりがいを感じ、また「女の子一人養うくらいの、経済力はある」と述べていることから自身の経済力について自信を持っている。彼女の経済力、また結婚における経済観念は山田がモデルとして掲げた「女性の経済力向上」とマッチしている(2010)。では「子育て」においては野々山や山田が述べたような、夫婦の交渉のもとに行う結婚をモデルにしているかということ、Mさんの場合は異なっている。

Mさん：(結婚相手の家事・育児への参加について)めっちゃ働いとんやったらいい。でも今の彼氏みたいなんやったら、絶対手伝って欲しい。ぜったい暇やもん。忙しいんやったらいいけど。なんも言わんと手伝ってくれたら、一番嬉しい・・・忙しくても。そんな良い人おらんかな。

キャリア追求意識も高く「非正規の相手でも構わない」と話しているが、男性には経済力を持つてほしいという考えはある。

Mさん：金持ちと結婚したいわけじゃないけど、私がいま手取り18~19万やから、それより上であって欲しい。1万でもいいから・・・そんな金持ちと結婚したいわけじゃない。(それはどうして?1万でも多くって言うのは?)

Mさん：男としての見栄を張って欲しい。わたし今まで頑張って働いたやんな?っていう。

Mさんは「キャリア追求」意識が強いが、彼氏に「自分より1万でもいいから多く稼いで欲しい」や育児の協力について「めっちゃ働いとんやったらいい」など、性別役割分業意識の強さが伺

える。これまで山田や野々山が提案する、共働きを想定した家族スタイルにおいては性別役割分業意識というよりは、夫婦各々の話し合いや交渉によって役割が決まるとされていた。しかしながら、このように「キャリア追求」意識を強く持っているながらも性別役割分業意識を持っているのは特徴的である。このような価値観をもつ M さんは、親について批判的な意見を持ちつつも、自分も同じような境遇にあると述べる。

M さん：お父さん駄目男やから。やから、お母さんの血を引き継いでるとしたら、いまの彼氏で正解やと思う。(お母さんに今の彼氏のことを言ったら) 反対されるやろうな。でもお父さんみたいな人好きになるって言うやん。それやったら、申し分ない。そっくり。やからそうなんやなって、たまに思うんやけど。

最後に、婚活についてだが M さんはこれまでに婚活を目的としたパーティに参加したことがあるが、「喋ってて楽しかったらいいけど、特に楽しくなかった」「縁だと思うのでパーティで良い人と会えたら良いと思うし、そこにこだわる気持ちはない」と回答している。

なお、「キャリア追求」意識を持ちながら性別役割分業意識が強いのは、M さんのみであった。M さんは「子育て中心主義」とまで言えるほどの、子育てに対する意見や主張は見られなかったが、結婚相手となる人に対して「(育児を) 忙しければ手伝わなくてもいい」としていることから、1) に分類した。

(4) 「子育て中心」ではない、かつ「キャリア追求」でもない一ロマンティッククラブ志向

この分類の人は、職業や子育てにやりがいを持つよりも、夫婦生活や自分の趣味を充実させて過ごしたいと望んでいる人々である。

A さん：いや、専業主婦は楽というか・・・家事大変やと思うけど・・・専業主婦よりは、副業やるほうが楽やおもうから・・・専業主婦にはならんと思う。大人しく、家事出来るとは思えへん。

B さん：(今の仕事を続けるかは) そのときによるんかなあ。産休、育休で2、3年休むとして・・・でも、両立できひんってなったら、辞めるんかな。銀行続けたいっていう気持ちもあるけど、まったく別の分野で仕事してみたいなとも思う。

(パートで?)

B さん：うん。パートでもいいし、喫茶店の店員でもいい。いまとぜんぜん違うことやってみたいかも。(今の会社に) 理想はいはる。会社員で、同じ窓口の先輩。いま34、5かな。働き方が理想。大学卒業して入って、ずっと働いてはってんけど、30・・・遅めで結婚して、育休取ってて、最近復活して。育休、産休明けの人って短縮して働く人いるやん? そういうわけじゃなく、ちゃんと全部やって、周りの様子もみて、大丈夫やったら早めにあがるっていう・・・でもふたをあけたら親がそばにいて、旦那さんもちゃんと手伝ってくれる人で。

G さん：(仕事を続けるかは) 旦那さんの収入による。自分の希望は専業主婦かな。家が専業主婦やから、その環境で育ってて、そのイメージが強いのもあるけど。

E さん：(専業主婦願望は) 半々かな。アニメばかり見てそう。だったら、小遣い稼いでパート出たりしたい。服とか自分のお金の方が使いやすくなってると思うね。週3で働くのが理想。

また、Iさんは現在大学院生であり調査した時点で就職活動は始まっていなかったことから「非キャリア追求」として分類している。子育てについては、「子育て中心主義」の人々のような憧れや理想を抱いていない。

Aさん：(子どもを)うちは欲しいと思わん！でも相手が欲しいなら。
(それはどうして?)

Aさん：なんでやろうな・・・育てられる自信がない・・・まともな子供に育てられる自信がないな・・・自分が結構適当やからさあ。

Bさん：あーでもどうやろ、反面教師？私は、子供がちっちゃいときも家をあげとく。まあいっか、ぐらいに思ってる。親は嫌やったらしくて中学高校になるまで働いてへんかった。

Gさん：(出産は)自分の事で精一杯やから、産んだらどうなってしまうん？と思ってさ。ドラマの見過ぎやねんけど、母体大丈夫かなって。栄養もなさそうやん。子どもに申し訳ないと思って。

この他、Eさんは「(子どもは)授かりものやからな。不妊治療してまでってわけじゃない。」と回答しIさんは「(出産願望は)あるけど、ドキュメンタリーシーンで見たら怖い。」と回答している。2)では親の子育てに対する責任感や規範意識を受け継いで、自分も親と同じようにしたいという傾向がみられた。対して3)では、Bさんのように子育てに熱心な親を見て自分は少し違う生き方をしたいと考える人もみられる。Bさんの母親は、子育てに関して高いポリシーを持っている。

Bさん母：(Bさんに対して)絶対生んだ方がいいとおもう。子供を産む事で成長するのよ、人は。子供をうんで、育てることで、女の人は成長する。だから子供を産んでなかったりしたら、わからへんこと、ようけあるかなとか思いますけどね。世の中では産まない人も多いじゃないですか。産めないのは仕方がないから、そうとして、産まない選択肢はなしやおもう。

Bさん母：働いてて、仕事をやめて、結婚して子供産むじゃないですか。そしたら毎日子供の世話で取り残されていくような感覚になるじゃないですか。それで女の人は、いまの仕事をもっと上に進めていく為には、ここで出産したら、っていうのがあるじゃないですか。そういうのも確かに感じて、社会に取り残されていく感覚をかんじて・・・その時主人がいったのは「なにを創るよりもいちばん生産的や」って。やめたら、その仕事に戻れないじゃないですか。同年代の友達はバリバリ働いてるのをみて、「やってられへんわ」って思った時期があって。(その時)主人が「どんな素晴らしいものをつくったりするよりも、ひとつの命を育てていくことが一番生産的や」って言われたんです。結構それを間にうけて、一生懸命してきたんですけど、それはそれで良かったかなって。で、その時に納得してやって、得たものがめちゃくちゃ大きかったから。

Bさんの両親は、2人とも昔ながらの伝統的な価値観をもって家族形成している。この点でご両親の意見は非常に一致していた。

Bさん母：(Bさんの結婚相手が外国人であったら)そらあかん。基本的な考え方がちがうやん。結婚って生活じゃないですか いちい

ちそこから言っただけで言ったら疲れるじゃないですか。価値観が違う人に合わせたら B が疲れるじゃないですか。最初は好きとか何とか言っただけで合わせるかもしれないけど、そのうち B が疲れてくると思う。外国人もそうでしょ？

B さん父：まあ、家族ができて、子供ができて、代々続いていくってことかな。幸いにもうちの親戚ってあまり離婚ってないんで。両親もないし、ここもないし、長く続くって為の条件っていうのがあるかな。そのための生活の水準とか、あるけど。

B さんの両親は、このように性別役割分業に基づいた家族に近い考え方を持っているが B さん自身は「そんな、専業主婦になりたいとも思わないけど、自分でバリバリ稼いでやっていけるほど、自立した人間でもないから」と回答している。

それでは、この分類の人々は「婚活」に対してどのような意識を抱いているだろうか。結果として、どの人も「婚活」には懐疑的な意見であるか、そもそも興味がないという意見であった。

A さん：婚活して、結婚することに囚われそうやからかなあ。強制的なイメージが強いから…自然な出会い方して、自然な形で好きになりたいなあ。

E さん：一回友達と（婚活パーティに）行ってきたけど…それは 20 代縛りのやつで、行ってんだけど。私その時一番若かったらしくて…去年かな？1 人 2 分くらいで男の人が交代してくんねよー…いろいろな人と話すねんけど…自分棚上げていうで？やっぱ、それなりの人が集まるっていう。

5.3 分析結果

「婚活」議論では 1) 専業主婦志向や 2) 共働き

志向、更にキャリア追求でありながら子育てに力を入れる 3) 早産・早育志向が主に取り上げられていた。しかし今回の調査でキャリア追求への意志はなく子育てへの憧れも持たない 4) ロマンティック・ラブ志向の人々の存在が確認できた。では図 2 において各分類で想定した特徴は当てはまっていたのだろうかを、以下で検証する。

(1) 「子育て中心」かつ「キャリア追求」ではない—専業主婦志向

この分類において特徴的なのは、企業に総合職として勤める D さんと L さんが「非キャリア志向」という点である。L さんは相手の経済力によっては仕事を続けても構わないと考えているが、相手に経済力があるなら「自分が子育てしたい」と回答していた。D さんにおいても、「自分の職業観が結婚するまで」と明言しており、「そこを覆すほどに（経済的な）責任を負えるかっていうのは、自信がない」としている。独身の間は総合職として働くが、結婚・出産後には今の仕事を「続けられない」と感じているようだ。

図 1 で見られた M 字曲線についても、20 代は正規雇用者が最も高いが後に逆転して非正規雇用者が最も高くなっている。一方でこの分類にあたる人たちは結婚後に全く仕事をしないわけではなく、F さんは「そのうち息苦しくならんぐらいでパートしたい」と回答している。つまり夫婦間の性別役割分業意識は薄れてきているが、「子育ては母親が責任を持つ」という意識は依然強いのである。先行研究においても近年の家族において「子ども中心主義」であることが、かえって結婚制度を成り立たせている側面があることがわかっている（永田 2003）。

(2) 「子育て中心」ではなく、かつ「キャリア追求」—共働き志向

この分類の特徴は、女性が男性と同等の経済力を持つ事で従来の性別役割分業ではなく夫婦相互

の交渉によって形成される点であった（野々山 2007）。調査結果においても、JさんとKさんが看護師としてキャリア追求しており、結婚相手についても「家事・育児に協力して欲しい」と回答している。また、家庭内のことだけでなく「自分の仕事に対して理解を示して欲しい」とも述べていた。野々山はキャリア追求する女性の場合、性別や年齢の規範が薄れる為に晩婚化の傾向が高まると述べている（野々山 2007）。JさんとKさんも「20代は仕事をしたい」と述べるものの、「子どもは産みたい」と考えていることから結婚は30代前後を目標にしている。このことから、キャリア志向であっても「出産」できる年齢が限定されることから、年齢の規範は残っている。また、JさんKさんは男性と同等の経済力を持つものの、結婚相手には「自分と同等の学歴」「自分と同等もしくはそれ以上の経済力」を求める回答内容であった。

一方、JさんやKさんのようなキャリア追求ではないがCさんは「結婚するなら男性から経済的に独立しておいた方がいい」と回答している。Cさんは母親が母子家庭で自分を育ててくれた経験から、このような考えに至っている。また結婚して男性に経済的に依存することで「女性の立場が弱くなる」と回答している。

この分類の人々は、出産・子育ての希望は持つものの「キャリア優先」であることが特徴である。それはJさんKさんのように職業への「やりがい」を感じている場合と、Cさんのように結婚することで女性の立場が弱くなることや経済的リスクが高まることへの恐れを抱いている場合がある。彼女たちの場合、どうしても「キャリア優先」であることから野々山が述べたように晩婚化の傾向は免れない（野々山 2007）。しかしながら、経済的リスクが緩和されていることからキャリア志向でない人たちに比べて、いくつになって

も結婚できる可能性がある。4類型の中で、最も選択機会の多い人々であると言える。

(3) 「子育て中心」かつ「キャリア追求」—早産・早育志向

この分類の人は、キャリア志向でありながら「子育て」優先であり、この特徴が見られたのはMさんのみであった。Mさんは、「20代のうちに出産・子育てしたい」と明言していないものの、「30歳が節目」「30歳までに結婚できなかったら、女友達とシェアハウスする」と述べている。この場合は先述したように、20代のうちに結婚・出産を機に育休を取るか仕事を辞めたとしても、また同じようにキャリアを歩むことができるという自信を持った人々である。Mさんの場合、専門学校を卒業した後に派遣社員として今の会社で務め、地域総合職（拠点正社員）としての地位を獲得した。またMさんは「結婚相手が非正規社員であっても構わない」と回答していることから、(2)のJさんやKさんのような相手への期待要望は低い。

(4) 「子育て中心」ではない、かつ「キャリア追求」でもない—ロマンティッククラブ志向

この分類の人々は、従来の「婚活」議論ではあまり取り上げられてこなかったが、限られた事例数の中ではあるものの13名のうち5名と、最も数多く見られた分類である。いずれも結婚の上で「夫婦関係」を楽しむといった内容を回答しており、(1)の人々が述べたような「子どもを育てる義務・責任」といった意識は希薄であった。Eさんは結婚の意義について「人生を楽しむため」と述べているが、こうした回答は他の分類では見られなかった。

また特徴的であったのは、Bさんの母親は「子育て」規範が非常に強いのにに対してBさん自身が「専業主婦にならなくていい」と考えている点である。Bさんは子育てに非常に熱心だった親を

みて「自分はそのまで熱心にやらなくてもいいかな」と感じている一方、出産後も子育てと仕事を両立させる会社の先輩を見て「理想だ」と述べている。これは先行研究で述べたように家庭以外で社会化されたことによって B さんは「専業主婦にならなくていい」と考えるに至ったのだと解釈する。つまり「母物語」ではなく「自己の物語」を生きているとも言えることから、4 分類の中で最も時代の移り変わりを反映しているのではないだろうか。

なお A さん I さんを「非キャリア追求」として扱ったが、A さんは一度就職した会社を退職し現在就職活動中であること、また I さんは大学院生として在学中であるためキャリアについて明確な回答が得られなかったことから (4) に分類した。また B さん E さん G さんも「非キャリア追求」であるが、(1) の人のように「結婚して今の仕事を辞めたい」という要望ではなく「結婚相手の都合があるから辞めてもいいし、続けてもいい」という考えであるのが特徴的であった。こうした考えは「(結婚においても職業においても) 楽しみたい」という意識の反映かもしれない。また他の分類の人に比べて、年齢規範も希薄である。しかしながら、E さんが「すごい料理できるとか、手に職あるとか・・・あったらいいけど無いから」と述べるように、非正規雇用である場合には 20 代のうちの結婚が最も必要な人々であると言え、先行研究でも述べたように社会の側からも支援が必要な人々である (松田 2013)。この分類の人たちは、ロマンティック・ラブ志向であることから (1) のように「家庭を持つため」「子どもを産むため」に結婚したいと考えることはない。また夫婦関係のみが目的である場合、なかなか結婚には結びつかないが永田が述べたように妊娠先行型結婚であれば、結婚の機会があると思われる (永田 2003)。

6. 結論

これまでの「婚活」議論では男女共働きが推奨されており、確かにこの場合経済的リスクの緩和は期待できるが、実際に生涯キャリア追求する女性はむしろ少数派であるという現状 (図 1) がある。更に出産・子育て期において育休を取るなどして子育て出来るのは限られた人であり、非正規雇用の場合は就業継続が難しい現実がある (松田 2013)。つまり出産・子育て期には夫の経済力に依存する人が殆どであり、これが困難であることが現代の少子化問題解決の難しさであると思われる。

つまり「キャリア」「子育て」の両取りの難しさから、本人の意識によって理想とする結婚生活も異なると考えた (図 2)。「子育て」意識が強く「キャリア追求」意識が弱い場合は 1) 専業主婦志向であり、夫が主に経済的責任を負う形を理想とする。「子育て」意識が弱く「キャリア追求」意識が強い場合は 2) 共働き志向であり、経済的にも精神的にも夫婦平等の関係を理想とする。また「子育て」意識が強く「キャリア追求」意識も強い場合は 3) 早産・早育志向になり、若いうちに出産・子育てをしてからキャリア追求に復帰したいと望んでいる。「子育て」意識も「キャリア追求」意識も弱い場合は 4) ロマンティックラブ志向になり、交際関係・夫婦関係を楽しむ事や趣味の充実を望んでいる。このように「子育て」と「キャリア追求」に対する意識の違いによって、結婚生活に対する考えが異なると考えた。

以上のことを確認する為に、23~24 歳の女性 13 名と親 3 名に対してインタビュー調査を行った。結果として、それぞれの分類ごとの特徴がほぼ合致していた。1) 専業主婦志向に該当する D さん F さん H さん L さんは結婚する上で「出産・子育て」への価値が大きく、社会的義務であるとも

位置付けている。このことから結婚する男性に対して一定の経済力を求めている。2) 共働き志向に該当する C さん K さん J さんは自分のキャリアや経済力の獲得が優先であり、出産・子育てはある程度キャリアを築いてからと考えている。また結婚することで男性に対して経済的に依存することへの恐れから、キャリア優先意識を持っている。この分類の人たちは晩婚化の傾向があるが、性別や年齢規範に捉われない分、他の分類に比べて高齢化しても結婚しやすいと考えられる。3) 早産・早育志向に該当する M さんはキャリア追求型でありながら、子育て・出産を 20 代のうちに済ませたいと考えている。現在勤める会社には派遣から入り、地域総合職まで昇進したことから自身の働き方に自信を持っており、1) の総合職女性である D さんが「男性を養える自信はない」と述べていたのに対し M さんは「結婚相手が非正規でも構わない」と回答していた。最後に 4) ロマンティックラブ志向に該当したのは A さん B さん E さん G さん I さんと、今回の調査で最も数が多かった。この分類の人たちの親も、E さんを除く全員の親が専業主婦であるが、「子育て中心」ではない、との傾向が見られた。特に B さんにおいては母親が強い「子育て」規範を持つ

ていたが、B さん自身は親の意見を受けた上で「子育てにはそこまで力を入れなくていい」と述べている。また仕事について「結婚相手の都合があるから辞めてもいいし、続けてもいい」と柔軟な考えを持っている。

山田は現代において結婚に様々なものを求め過ぎていることが、かえって結婚に関する問題を複雑化させているのだと述べている（山田 2010：232）。この状態を、むしろ個人の選択肢が豊富な機会であると捉えなおすことが出来よう（図 2）。またこれまでの婚活論で述べられた「共働き」夫婦を目指すだけではなく出産を機に退職したり、非正規で働き続けなければならない女性も一定数存在するだろう。

これまでの婚活論では「共働き」夫婦を目指すことで経済的リスクを減らすことが望ましいとされてきた。しかし、実際こうした夫婦関係を形成するのはむしろ一部の女性たちであり、その要因は子育てと仕事の両立が難しさにある。また、非正規の場合に子育て期間も就労を続けるのは難しいことがわかっている（松田 2013）。少子化対策としての「婚活」を考えるのであれば、以上のように結婚後に子供を育て上げるまでの期間におけるきめ細やかな支援として捉えなおす必要がある。

〔文献〕

- Giddens, A., 1992, *The Transformation of Intimacy*, Polity Press. (=1995, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容』而立書房.)
- 本多真隆, 2013, 「戦後民主化と家族の情緒-「家族制度」と「民主主義的家族」の対比を中心に」『家族社会学研究』25 (1): 64-75.
- 磯野誠一・磯野富士子, 1956, 「家族の新しいモラルと古いモラル」磯野栄一・川島武宜・小山隆編『現代家族講座 第1巻 新しい家族』河出書房, 93-134.
- 磯野誠一・磯野富士子, 1958, 『家族制度-醇風美俗を中心にして』岩波書店.
- 川島武宜, [1948] 1983, 「日本社会の家族的構成」『川島武宜著作集 第十巻 家族および家族法 1』岩波書店.
- 北村達, 1955, 『近代家族』大明堂.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2011, 『第14回出生動向基本調査——結婚と出産に関する全国調査（独身者調査の結果概要）』.
- 永田夏来, 2003, 「愛情が先か、子ども先か-結婚の原理とその論理構成」社会学年報.
- 野々山久也・袖井孝子・篠崎正美, 1996, 『家族社会学シリーズ①いま家族に何が起きているのか-家族社会学のパラダイム転換をめぐる』ミネルヴァ書房.

- 野々山久也, 2007, 『現代家族のパラダイム革新 直系家族・夫婦制家族から合意制家族へ』東京大学出版会.
- 松田茂樹, 2013, 『少子化論——なぜまだ結婚・出産しやすい国にならないのか』勁草書房.
- 文部省, 1937, 『国体の本義』内閣印刷局.
- 労働政策研究・研修機構, 2008, 『「有期契約労働者の育児休業等の利用状況に関する研究」報告書』.
- 総務省, 2012, 『労働力調査（詳細集計）』.
- 土屋薫編, 2003, 『これからの家族関係学』角川学芸出版.
- 山田昌弘・白川桃子, 2008, 『「婚活」時代』株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- 山田昌弘編, 2010, 『「婚活」現象の社会学』東洋経済新報社.
- 山根常男, 1956, 「夫婦関係」磯村栄一・川島武宜・小山隆編『現代家族講座 第3巻 結婚の幸福』河出書房.
- 善積京子, 2000, 『シリーズ〈家族はいま…〉 ①結婚とパートナー関係：問い直される夫婦』ミネルヴァ書房.